



大洲高校PTA月報

平成31年1月号

新年あけましておめでとうございます

本年もどうぞよろしく願い申し上げます



会員寄稿

保健教育相談課から

保健教育相談課長 宮本 政明

このPTA月報に寄稿するにあたり、教育相談（カウンセリング）の全体像を改めて理解しておそうと考え、カウンセリングに関する本を読みました。選んだ本は河合隼雄先生の「河合隼雄のカウンセリング教室」です。先生の講演集なので言葉は平易なのですが、その経験や思想から伝わる内容の面白さや深さに大いに感銘を受けました。また、日頃から生徒のカウンセリングを担当されているスクールライフアドバイザーの先生の仕事の難しさや奥深さを垣間見ることができたように思いました。

本の中で、先生は「カウンセラーは研究者、勝負師、芸術家の3つ側面を持っていないといけない。そして、この3つがうまくミックスされていないといけない。」と言われていました。また、「日本のカウンセラーは、勝負師根性の少ない人が多いのではないか。みんな「受け入れる」ということを考えすぎる。本当に受け入れることは勝負だということが分かっていない人が多い。」とも言われていました。先生の文章の「カウンセラー」を「教師」に、「クライアント（相談者）」を「生徒」という言葉で置き換えてみると、これは教師が生徒に接するときの関係にも通じる場所があると思います。自分が生徒とのコミュニケーションで勝負と言えるものを行っているのか、また、普段の取り組みのどんな場面で勝負をしているのかを今一度考える必要があると思いました。

「箱庭療法（箱の中におもちゃなどを自由に配置する手法）があって、それは治療者がクライアントを治すというのではなく、クライアントが箱庭を置いてそれを使い自分で治っていく療法です。しかし、それだけではだめで、やはりその場にカウンセラーがいるということがものすごく大事です。その時に来た人の話を本当に真正面から聞く人がいないと無意味です。」と治療の場面で本音を受け止める「カウンセラーが共にいる」という意味の大切さを強調されていました。また、「カウンセリングは週一時間しか会わなくても、絶えず会っているのと同じか、あるいはそれよりもすごい効果がある」ということも知りました。

本校の教育相談の取組に話を戻すと、スクールライフアドバイザーの山口先生が、毎週水曜日に、生徒のカウンセリングを行っています。生徒だけでなく保護者の方も、気軽に相談に来ていただければと思います。（場所は本館一階の教育相談室です。）